

No.85 西 雅秋 「遡洄する大木」

Masaaki Nishi

北川フラムさんのコラム / 1996 (平成 8) 年 9 月 15 日付 立川市市報記事より

西雅秋は、鉄の造形物を土の中に埋めたり、水の中に沈める、あるいは空気にさらしておき、ある期間がたったらその変化を見せる。つまり、物質の変化によって時間を考えさせる作品を制作している作家である。

ファーレ立川では、伐り倒された大木をブロンズで作っているが、それは車止めとして、またある時にはベンチとして機能する。五つの切り口には、それぞれ五感が想定されており、道の傍らにあって、街や人の動きをじっと見つめ、感じ取っているかのようだ。この作品が型を取った大木は百余年を生き、ある日突然伐採された。さらに十年、ひっそりと道端にあったという。

この金属の木は年輪を刻むことも、腐食することもないが、路傍の石のように、この街の大切な一部としてあり続けることだろう。

作家のメッセージ / 日本住宅公団 (現 : UR 都市機構) 「ミニ通信」より

ふと気付いた時、その路傍の大木はそこに10年近く横たわっていた。

今、私のこの土地での生の時間をたえず見つめていたかと思うと、その視線に気付かなかった自分の速度が恥ずかしく、また逆に爽快でもあった。

すでに表面は腐り始め年輪に沿って数年ずつまとめて崩れ始めている。

約100年を過ごしたその生は、48年前の私の産声を知り、その前年の人類の狂気が大地を叩き付けたその振動も西方より感じ取ったに違いない。

歴史の数々の悲劇、それ以上の歓喜を、繰り返し年輪の隙間に蓄え続け、そして太った。

10年前一瞬にして大地から命を絶たれそこに横たわるあなたは時間を遡洄しながら一枚一枚過去の記憶を零し続けている。